香川県立保健医療大学紀要　第1巻，147－151，2004

育児疑似体験人形を用いた体験学習の教育効果

野口　純子*

*香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科**

Educational Effects of Practical Experience Using an Infant Simulation Doll

Junko Noguchi*

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences

Abstract

Through learning, using an infant simulation doll, changes in the image of the doll which 12 midwifery major students had, were investigated. The score in nine of the ten items concerning positive images increased, while those for nine of the ten negative images decreased. Their participation in the program allowed the students to form positive images of the doll, such as, "cute", "wanting to raise a baby", "lovable", and "wanting to hold a baby". Furthermore, concerning the introduction of the present program into health education, many subjects expressed that "experiencing childrearing in parenting classes for parents will make mothers and fathers better at childrearing".

Key Words：体験学習 (practical experience)，教育教材 (educational material)，育児疑似体験人形 (infant simulation doll).

*連絡先：〒761－0123　香川県木田郡牟礼町大字原281－1　香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科　野口　純子
*Correspondence to: Junko Noguchi, Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences, 281－1 Hara, Mure-cho, Kita-gun, Kagawa, 761－0123, Japan

はじめに

少子化や核家族に伴い，青年期にある学生が妊産婦や乳幼児と接する機会は少なくなっており，看護教育においても教育教材を活用しての講義・演習が行なわれている．母性看護学領域においては，妊娠期の対象理解と援助方法の学習に，妊婦体験ジャケットの着用を取り入れた疑似妊婦体験学習の有効性について報告したものが多くみられ[1-3]，育児技術の習得に関しては，新生児人形を用いての沐浴・おむつ交換・抱っこ等の演習を実施している．しかし，新生児人形では自分の実施した技術に対しての反応がないため，赤ちゃんに対してかわいいと思う気持ちを含めた養護性を高める情意領域の習得までは難しい状況である．育児疑似体験人形を用いた研究[4]においては，育児生活をリアルに再現することができ，養護性を高める体験学習として有効であるとされているが，研究報告は少ない．

本研究の目的は，育児疑似体験人形を教材として用いた演習を取り入れ，育児技術の体験を行うことで，育児疑似体験人形に対するイメージの変化と演習後に健康教育への活用の可能性について学生が考えた内容を分析し，教材としての活用方法と教育効果について検討することである．

方　法

1．対象：A短期大学専攻科助産学専攻学生12名

2．実施時期：平成16年7月15日．

3．学習進度：助産診断・技術学Ⅳ（妊娠期）の講義は全て終了．助産診断・技術学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（ライフサイクル各期）・Ⅴ（分娩期）・Ⅵ（産褥期）は進行中であるが，健康教育についての講義内容は終了している．助産診断技術学演習のうち，妊婦家庭訪問演習（ロールプレイ），模擬分娩準備教育は終了している．対象者全員が，看護基礎教育課程において，沐浴・おむつ交換などの育児技術を既に体験していた．

4．方法

1）育児疑似体験人形（以下，マイベビー）は，米国で開発され，日本版に改良されたBaby Think It Over社製の人形「育児体感赤ちゃんマイベビー」を用いた（写真1，2）．人形の大きさは，身長約50cm・体重約3kgである．この人形は，8種類の理由（あやして欲しい，オムツを替えて欲しい，ミルクが欲しい，虐待された等）によって異なる泣き声で泣き，適切な対応（世話）をすると泣き止み，さらに，うれしい声も出すように制御されている．世話の要求以外に，姿勢や首の支持を怠った時や虐待などをした場合には，激しく泣き抗議する反応がある．実際に体験する場合には，15日間子育てを体験するオートプログラム，15日分の子育てデータから1つ自由に選択できるカスタムプログラム，様々な種類の世話を体験できる説明モード等をコントローラで選択できる．

写真1　育児体感赤ちゃん　マイベビー

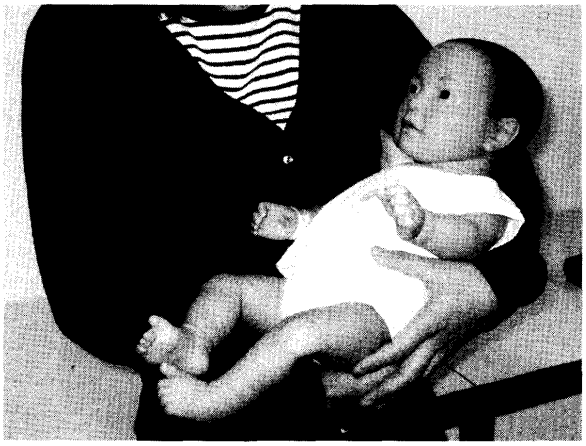

写真2　マイベビーを抱っこした様子

2）演習方法：今回は，短時間で実際と同様の体験ができる練習モードを使用した．内容は，①ミルク編，②ゲップ編，③オムツ編，④あやす編，⑤ぐずりとせき編の世話である．

練習モードでの1人の学生の体験時間は，約15分間である．学生を3グループに分け，1グループ4人で同時に実施した．

演習実施前には，育児技術についての説明は

行わず，「赤ちゃんが泣いたら，あなたが必要と思う世話をして下さい」とのみ伝えた．

3）調査内容：赤ちゃんに対する形容詞について文献検討の結果[5-7]，赤ちゃんのイメージに関する尺度構成は，肯定的イメージ10項目と否定的イメージ10項目のそれぞれ対極する質問項目を設定し，予備調査に基づいて合計20項目作成した．体験実施前後に，「とてもそう思わない」1点，「そう思わない」2点，「どちらでもない」3点，「そう思う」4点，「とてもそう思う」5点の5段階のリッカート法にて回答を求めた．さらに，人形に対面した時の気持ち，抱っこした時の気持ち，泣き出した時の気持ち，今後助産師として健康教育を実践する際に教材としての活用方法についての考えを自由記載で記述してもらった．

5．倫理的配慮：学生には，演習と調査の目的を口頭で伝え，個人が特定されないこと及び成績には影響しないことを説明し，同意を得た学生に調査票を配布した．

6．分析方法：体験学習前後のイメージの変化については，エクセルにて記述統計を行った．学生の自由記載した内容については，意味内容が類似したものをカテゴリー化した．これらカテゴリー化した内容について，専門領域の教員に相談しながら検討した．

結　果

1．体験実施前後のイメージの変化

肯定的イメージ10項目のうち「重い」を除く9項目が，体験学習実施後に高くなっていた（図1）．「かわいい」は，実施後に4.9であり，「育てたい」「好き」「抱っこしたい」などの8項目が4.0以上となっていた．否定的イメージ10項目のうち「軽い」を除く9項目が，体験学習後に低くなっていた（図2）．実施後に，「憎らしい」「遠ざけたい」「嫌い」など8項目が1.5以下となっていた．

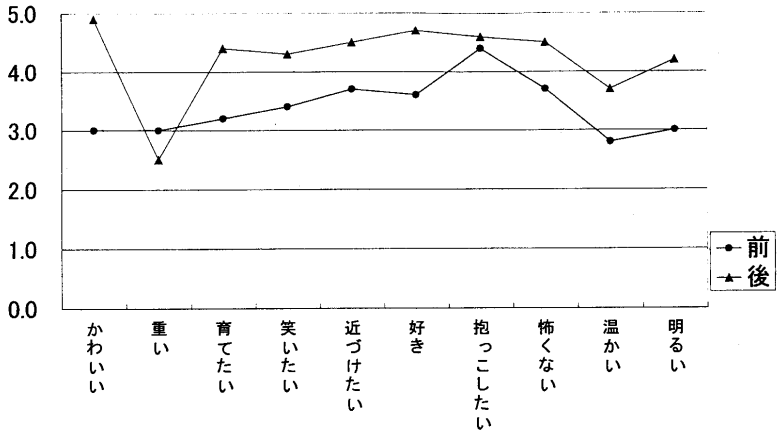

図1　肯定的イメージ　10項目

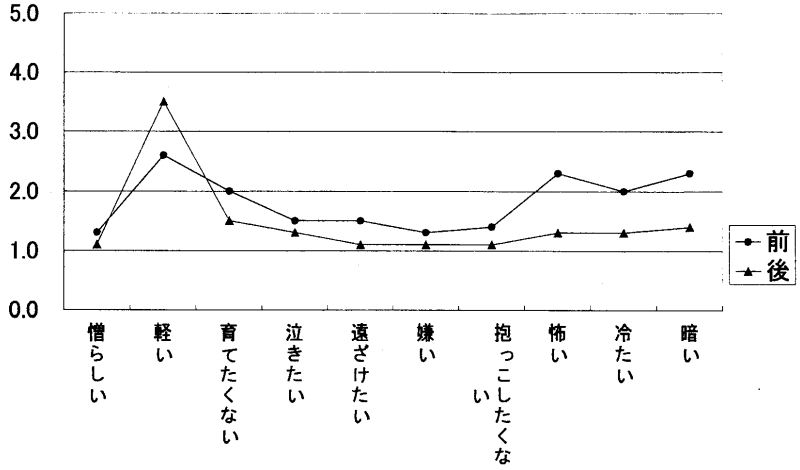

図2　否定的イメージ　10項目

2．人形に対面した時の気持ちと抱っこした時の気持ち

人形に対面した時の気持ちは，表1の通り「赤ちゃんらしくない顔」と記載したものが7名と多く，次いで「抱っこしたい，かわいい」と記載したものが4名であった．

人形を抱っこした時の気持ちは，表2の通り「かわいい，うれしい」と記載した者が9名であり，「首が動くので抱くのが難しい」と記載したものが2名であった．

人形が泣き出した時の気持ちは，「どうしたらいいのかわからない」5名，「何で泣いているのかな」5名であった（表3）．

表1　対面した時の気持ち　n=12

赤ちゃんらしくない顔，妙にリアル	7
抱っこしたい，かわいい	4
どうしたらいいのか	1

表2　抱っこした時の気持ち　n=12

かわいい，うれしい，愛らしい	9
首が動くので抱くのが難しい	2
意外と軽い	1

表3　泣き出した時の気持ち　n=12

どうしたらいいのかわからない	5
何で泣いているのかな	5
抱っこしよう	1
早く泣き止ませてあげたい	1

3．助産師として健康教育での教材としての活用方法

自由記載した内容をカテゴリー化した結果，3つのカテゴリーに分けられた．妊娠中の母親学級や両親学級で，将来父親・母親となる人への活用方法を記載していたものが9件，中高生への活用方法を記載していたものが2件，小学生への活用方法を記載していたものが1件であった．具体的内容としては，「妊娠期の母親に子どもについて実感をもってもらい，出産の楽しみを感じてもらう．父親にも同様に，あやし方や抱っこの方法，また，何をしてあげると泣き止むかなどを子どもが生まれてくる前に体験してもらうことで，子育てによい影響を与える」「両親学級で体験してもらい，はじめは何で泣いているのかわからないことをよく聞いてみると，泣き方が違うということを伝えられるのではないか」「両親学級で実際に体験したり，参加できない父親などに貸し出し，家庭で体験してもらう」などの実際の場面をイメージしたものが記載されていた．

高校生への活用については，「実際に事業に参加して，本当の赤ちゃんを抱っこするというように，思春期では実際に赤ちゃんに触れ合うのが一番よい」と人形よりも実際の赤ちゃんに触れ合う方がよいという記載もあった．

考　察

育児体験学習実施後に，肯定的イメージが高くなった．特に，「かわいい」は実施後の平均点が4.9と高かった．さらに，「育てたい」「好き」「抱っこしたい」など8項目が平均点4.0以上であり，反対に，否定的イメージは体験後に低くなっていた．「憎らしい」「遠ざけたい」「嫌い」など8項目は，平均点1.5以下であった．赤ちゃんが泣いた時に，自分の行った育児技術（おむつ交換など）によって泣き止んだり，「クー」と満足な声を上げる等の反応が見られることにより，赤ちゃんに対する肯定的イメージは高くなったと考える．人形を抱っこした時は，「かわいい」「うれしい」と感じた者が多く，泣き出した時は，「どうしたらいいかわからない」「何で泣いているのだろう」と原因を考えたり，どのようにすれば泣きやむか迷ったりと，実際の赤ちゃんに接する時の感情に近くなっていた．自分が実施した育児技術に対して，対象者から反応がみられることは，自信にもつながると考えられる．また，反応があることにより自然な声かけもできており，看護技術の認知領域・精神運動領域だけでなく情意領域を養うことにつながり[8-9]，育児技術の習得とともに学生の養護性を高めることに効果があると考える．学生自身が，マイベビーを自分の子どもとして家庭に持ち帰って世話を行うことにより，実際の育児の楽しさや大変さを実感することも可能ではないかと思われる．先行研究においては，育児行動の変化をビデオで分析した結果から，体験後には緊張がとれベビーの泣き声を識別した適切な対応やベビーを見つめて笑顔で話しかけるなど自然の対応が見られる

ようになった[4]とあり，今後は体験内容と分析方法の検討が必要である．

健康教育への活用としては，母親学級での活用や両親学級での父親への育児体験について実際の場面をイメージした内容を具体的に考えられていた．これは，模擬母親学級の演習を実施後であったこととも関連があると思われる．中高生に対しては，活用方法の記載が漠然としており，本物の赤ちゃんと実際に触れ合った方が効果的であるという意見も見られ，対象に応じた教材の活用についても感じることができていた．「思春期における保健・福祉体験学習事業」は，1994年から開始され，現在ではかなり多くの市町村で実践されている[10]．さらに，中央教育審議会が1998年「新しい時代を拓く心を育てるために－次世代を育てる心を失う危機－」と題する答申を提出した中に，中学・高校生が乳幼児と交流する体験を意図的に与えていくことを提言している．このような乳幼児との交流学習は，生徒が人とのかかわり方を学び，養護性を培う教育としての役割は大きく[11]，対象の発達段階や社会現象なども考慮した教材の活用が重要となる．特に，この人形は，背中にスイッチがあり，キーを押すことで人形の動きを作動させたり止めたりする場面を見せることが，マイナスイメージとして示すことにつながるおそれがあるので，使用にあたっては慎重でなければならない．

体験学習は，学習者が自ら体験することで体得する学習方法であり，自分のからだやこころ，知能や感覚など自分のすべてを駆使して学習することで，“知る，わかる”レベルから“実感できる，実際に感じて理解できる”レベルに到達できる[12]とされている．教育教材を活用して，学生に体験させることと実際に体験した教材をさらに，自分自身が対象者への健康教育を実施する場合における活用の可能性を考えさせたことは，対象に応じた教材の活用について具体的にイメージできる機会となったと思われる．

結　論

マイベビーを教材として用いた育児疑似体験学習は，赤ちゃんに対する肯定的イメージを高め，育児技術の習得とともに養護性を高める教育効果があると考えられる．さらに，健康教育を実施する際に，対象に応じた教材の活用について考える機会となることが示唆された．

おわりに

本研究の限界は，対象者が看護基礎教育終了後に助産師を目指して学習途上の学生である為，育児技術の実施経験があり子どもに対する感情も肯定的イメージが高いことが考えられ，一般化することは難しい．今後は，養護性及び親準備性に関する内容を含めた尺度の開発及び信頼性・妥当性を検討していきたい．さらに，結婚前の青年期の男女に対しての活用や対象及び周囲の協力が得られれば，家庭で何日か育児体験を行ってみることも検討し，教材としての活用の工夫を重ねていきたいと考えている．

文　献

1）濱口幸美，池田浩子，宮崎つた子，寺田香里，我部山キヨ子（2001）母性看護学における妊婦体験学習の効果，三重看護学誌3(2)：33－40.

2）二瓶良子，箆伊久美子，小笹由香，梶原祥子（2000）妊婦擬似体験学習の有効性に関する検討，東邦大学医療短期大学紀要14：12－21.

3）小川久貴子（2002）母性看護学講義の疑似妊婦体験学習で得た学生の妊婦理解，日本ウーマンズヘルス学会誌1：36－44.

4）岡田由香，岡田奈純，布原佳奈，高橋弘子（2002）養護性を高めるための教育教材の活用－育児疑似体験人形の教育効果－，日本看護研究学会誌25(3)：409.

5）岩下豊彦（1992）“SD法によるイメージの測定”，川島書店，東京，p44－63.

6）松村惠子（1994）保育園実習における健康な子どもの理解－学習経験の出現頻度測定とイメージ測定からの一考察－，聖母女子短期大学紀要，第7号：81－93.

7）花沢成一（1999）“母性心理学”，第2版，医学書院，東京，p61－70.

8）田島桂子（1998）“看護教育評価の基礎と実際”，医学書院，東京，p25－50.

9）杉森みど里（1999）“看護教育学”，第3版，医学書院，東京，p122－124.

10）清水凡生（2001）“総合思春期学”，診断と治療社，東京，p321－327.

11）松村京子（2002）人とのかかわり方を学び養護性を培う教育，思春期学20(1)：14－19.

12）藤岡完治，野村明美（2000）“わかる授業をつくる看護教育技法3シミュレーション・体験学習”，医学書院，東京，p133－144.

受付日　2004年10月29日